



Title	デザイン史フォーラム編『国際デザイン史：日本の意匠と東西交流』思文閣出版 2001年
Author(s)	太田, 喬夫
Citation	デザイン理論. 2001, 40, p. 96-98
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52847">https://doi.org/10.18910/52847</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

**デザイン史フォーラム編****『国際デザイン史——日本の意匠と東西交流』**

思文閣出版 2001年

太田喬夫／京都工芸繊維大学

序文で述べられているように、これまで近代デザイン史を扱った日本の出版物は、1970年代半ばまで欧米一辺倒で、ほとんどがイギリス、ドイツ、フランスの近代デザイン史の、それも主に第二次大戦までの紹介を扱う内容であった。この後、同年代後半に、明治・大正・昭和にかけての日本の近代デザイン史研究がようやく行われるようになった。本書は、これに続くいわば第三の近代デザイン史研究を目指している。すなわちこれまでのヨーロッパおよび日本中心のデザイン史に対し、国際交流史としての近代デザイン史、簡略していえば本書の題名である「国際デザイン史」をめざしている。このデザイン史は、「世界デザイン史」とも異なる。「世界デザイン史」が各国別の違いを強調しデザイン史の集合になりがちなのにに対し、「国際デザイン史」は、むしろ各国相互の影響関係や類似性を強調するからである。本書は、70年代に台頭したいわゆる「受容美学」の流れにある、また文化的グローバルゼーションのなかでの研究成果であるということができる。

以上のような基本的なプロジェクトを掲げた総合研究は、たしかに従来のデザイン研究に見られないもので、この点、本書の刊行は、画期的意義を持っている。

本書には、イギリス、アメリカ、ドイツ、オーストリア、イタリア、フランス、ベルギー、オランダ、スイスの欧米諸国、それにロシアの項目があり、それに続いて東欧諸国と北欧諸国の項目がある。最初に各國、地域別に交流史の年表が示され、次に「○○とのデザイン交流」なる論考があり、そのあとで各國、

地域の交流史の各論が示される。執筆者は、デザイン史の専門家だけでなく、美学、美術史、建築史、環境工学、英文学、建築設計などの隣接諸学科の研究者にも及ぶ。今ここで各論考を詳細に批評する余裕はない。筆者が関心を持った点、問題だと思った点をアトランダムに記しておきたい。

「イギリスとのデザイン交流」（藤田）においては、漫画が日本文化の代表のひとつであること、万博、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館が重要な役割を果たしたこと、ペプスナーの「モダン・デザインの展開」とバナム（バンハム）の『第一機械時代の理論とデザイン』が近代の古典的な書物であること、イギリスでは1977年にデザイン史学会が創設されデザイン史が新しい研究領域であること——これらのこと再確認あるいは新たに知る。『芸術論における日英の交流』（神林）では、浮世絵が一般に純粹芸術、ハイアート、フォーマリズム、「美学」に対するなんらかのアンチテーゼとしての「デザイン」として、また日本の伝統的な正当の美意識のイデオロギーを見直す契機として評価される。また、ワイルドの唯美主義運動に日本の美術が一定の寄与したこと（ランボーン）が事実として示された。このように、日本のデザインは、フォーマリズムや唯美主義の文脈で、また芸術と生活との融合の典型例という文脈でイギリスに受容されたという。

図式的に言えば、1880年代までは日本の室内や美術が欧米で部分的に注目され、1900年前後はジャポニズム（版画）が隆盛し、その後日本的思想（禅）が西欧で受け入れられ

ていったといえる。

武田五一の考えていた「日本のセセッション」(足立)の指摘、また、日本の屏風をライトが壁面装飾に用いたこと(並木)、また非対称分割の屏風のもつ「折り曲げる」機能と構造をアイリーン・グレイが注目したこと(川上)という指摘は、注目に値する。その他、ウォーリズの『吾家の設計』での「ミニマムにして文化的」な住宅の構想が日本に移植された洋風住宅の原像のひとつであったという指摘も、おもしろかった。

イギリスとアメリカの諸論考の充実に比べて他の諸国の論考がやや弱く感じられた。「深層のジャポニズム」(キルシュ)には関心をもったが、論考を読む限りでは、非対称の均衡即日本という図式が目立ち、それがなぜ「モダニズムからあらゆる日本の影響を取り除いたら、何が残るだろう」という日本の積極的意義と結びつきにくい。アクチュアルで興味ある交流の分野として、たとえば「エコロジカル・デザインと日本」や「ペレストロイカ以後」、「ミラノ=トーキョー・コネクション」といった論考があるが、交流・影響関係は示唆にとどまる。「ル・コルビュジェと日本の近代建築」(松阪)では、ル・コルビュジェの理念の意識化、隠蔽、忘却というタイトル自体、交流のあり方を象徴していておもしろいと思った。

筆者が一番関心をもったのは、「オランダとのデザイン交流」(園府寺)である。論者は、ここで「デザイン」概念そのものに注意を払っているからである。「デザイン」というものを生活装飾品としてではなく、人と“もの”，人と環境、人と社会といった関係についての、ひいては“生き方”についての思想・意志の総体として捉えたとき、その長い“交流史”が何か表層的なもののように見えてくる」と言う。筆者も同感である。そして論者

は「デザインというものが、そもそも伝わりにくいものだという事情がある。——特定の場での“生き方”に関する思想と意志の総体としてのデザインは、決して容易には伝播しない」という。この見解は、序文での編者(藤田)の「デザイン」概念と対立する。両者のどちらが正しくてどちらが間違っているというより、両方の契機を「デザイン」概念はいつもあわせ持っているのではないか。いずれにせよ園府寺の発言は、デザイン専門家にとっては自明の「デザイン」に反省を促すものとしても注目したい。

ひとつ問題点を挙げておく。「デザイン」のよき特色として芸術・アートと比較して「物理的に束縛されないイデアであるデザインは、……受け手さえいれば無数の天体にまでそのまま伝えることが出来る」(序文)というが果たしてそういうことが出来るのか。この疑問との関連で、「デザイン」概念が一番問題であるように思われる。「純粹芸術」との対比で工芸、建築、写真、版画、インダストリアル・デザインなどの造形芸術ないし視覚芸術、「応用芸術」を「デザイン」と称し、それに何の反省加えず、研究を行うことに不安を筆者は感じる。少なくとも芸術・アートとデザインとの関係、文化とデザインとの関係は、もう少し明確にしておくべきだろう。アートではなく今なぜデザインなのか。こうしたアクチュアルな問い合わせにも、交流史としてのデザイン史は答えてほしい。筆者に限れば、浮世絵の再評価もよいが、それ以上にやはり今日の時点からみて日本の都市生活のデザインの貧しさを尚強く意識する立場から、デザインの近代史、交流史の見直しをしてほしい。言い換えれば、ディテールとして、また伝統的な生活の知恵としての個々の「デザイン」は、われわれの感性になお強く訴えるものを持っているし、それはインターナショ

ナルな普遍性も持ち得ていると思う。さらにインダストリアル・デザインにもソニーの製品等にインターナショナルな良さを見いだすことが出来ると思う。しかし、社会システムと関連する西欧のモダニズムのデザイン思想は、はたしてどれほど日本に理解され受容され得たか疑問である。生活と関連したトータルなデザイン・システムの考えが、日本では十分育ち得なかつたのではないか。全体として乱雑で余裕のない日本の都市の景観と生活に満足している人々ははたしてどれほどいるのだろうか。「アメリカが日本に及ぼした最大の影響は個々のデザインではなく、デザインのシステムであった。」(藤田)と述べられているが、それは商業・産業領域に限られ都市生活全体のデザインにまで及んだのか疑問である。

その他、疑問点は決して少なくないが、本書により、多くの忘れられた先人たちの努力と成果があって今日のデザイン交流があることを改めて理解することが出来た。編者を中心とした画期的なプロジェクトの最初の成果として高く評価するとともに、今後のさらなる成果を期待したい。